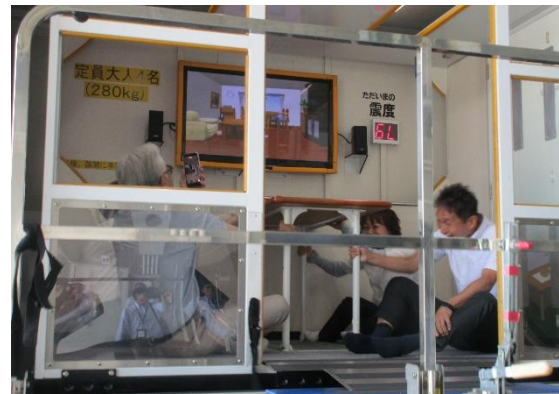


防災対策調査特別委員会 行政視察調査報告書

- 1 視 察 日 2026年 7 月 8 日（水）
- 2 視 察 先 ○兵庫県三木市
兵庫県立広域防災センター
- 3 視 察 者
- | | |
|---------|-----------------|
| 委 員 長 | 義 本 み ど り |
| 副 委 員 長 | 中 尾 浩 二 |
| 委 員 | 石 田 清 |
| 委 員 | 岡 本 昭 治 |
| 委 員 | 北 原 大 策 |
| 委 員 | 清 水 寛 也 |
| 委 員 | 米 田 達 也 |
| 当 局 | 原 田 泰 三（危機管理部長） |
| 議会事務局 | 舩 越 初 美 |



施設紹介や過去の災害から暮らしの中での防災、防火など災害への備えのアドバイスを受ける委員



【地震体験】
起震車にて震度 6 を体験中



【煙避難体験】
暗く模擬煙（水蒸気）が充満した迷路室で避難を体験



兵庫県立広域防災センター前にて

日 時	2026 年 7 月 8 日（水） 午後 1 時～午後 3 時
視 察 先	兵庫県三木市
調査項目	兵庫県立広域防災センター
調査内容	当施設は、阪神・淡路大震災で明らかとなった課題と教訓を踏まえ、平成 7 年 7 月に整備方針が位置付けられた広域防災拠点である。約 308 ヘクタール（約 2km×1.5km）の広大な敷地は、東京ディズニーリゾートの約 1.5 倍の広さを有する。震災では、消防ホースの規格が異なり自治体間で連結できなかったこと、全国から応援に駆け付けた警察・消防・自衛隊車両の受入れ場所が不足したこと、自衛隊への災害派遣要請や受入れに混乱が生じたことなど、災害への備えや初動体制、関係機関の連携の重要性が浮き彫りとなった。こうした教訓を踏まえ、センターでは平時と災害時の両方で活用できる施設整備が行われている。陸上競技場の地下は備蓄倉庫となっており、災害時には競技場をヘリポートとして活用できるよう周辺の電柱を地中化している。また、競技場は自衛隊車両の集結場所、屋内テニスコートは救援物資の集積・仕分け拠点として利用されるなど、日常利用と災害対応を両立した施設となっている。県内には複数の広域防災拠点が整備されており、但馬地域ではコウノトリ但馬空港が広域防災拠点として位置付けられ、防災資機材や救援物資が備蓄されている。阪神・淡路大震災では、生き埋めになった人の約 97.5%が家族や近隣住民によって救助され、消防・警察・自衛隊などの救助隊による救助は約 1.7%であったことが紹介され、自助・共助の重要性について学んだ。 体験学習では、阪神・淡路大震災の映像を視聴した後、起震車による震度 5・6・7 の揺れや熊本地震、関東大震災等を想定した地震を体験した。また、水蒸気を煙に見立てた煙避難体験では、3 人 1 組で迷路を避難した。今回は約 35℃で実施されたが、消防隊の訓練では約 80℃の環境で行われるとの説明を受けた。
所 感	平時から利用している施設を災害時にも活用できる設計は、維持管理の面でも実効性が高く、大変参考になった。起震車や煙避難体験では、映像や知識だけでは分からない災害の恐ろしさを体感した。震度 7 では身動きが取れず、煙の中では声も届きにくく、冷静な判断が難しくなることを実感した。行政による公助には限界があり、日頃から家庭や地域で備えを進めることが、人命を守ることにつながる。今回得た知識と経験を、まずは自分自身の備えに生かし、家族、そして地域へと少しずつ広げていきたい。同時に豊岡市の防災施策や地域防災力の向上に生かしていきたいと考える。